

政治的教養を育む教育の充実に向けて

－全ての教員による実践を目指して－

高校教育研修課	主任指導主事兼課長	坂東 修司
	主任指導主事	横山 恵子
	主任指導主事	摺石 敏之
義務教育研修課	指導主事	田中 義晃
企画調査課	指導主事	廣田 穰

はじめに

平成 27 年 6 月に公職選挙法が改正され、選挙権を有する者の年齢が満 18 歳以上に引き下げられたことに伴い、国は同年 11 月に高校生向けの副教材『私たちが拓く日本の未来』を作成した。これを受けて、本県では平成 28 年 3 月に教員向けの事例集『参画と協働が拓く兵庫の未来』を作成し、各高等学校に配布した。本県においては「政治的教養を育む教育」を「生徒が学校生活のあらゆる場面で、実際の人間関係や出来事、課題への向き合い方を通じて、民主主義とは何か、自由とは何かなどを自分で理解を深め、身近な地域の課題解決や多様な他者との合意形成を図る力を身に付けるための教育」と捉え、指導の充実を図っているところである。そして、平成 30 年 10 月には、政治的教養を育む教育のさらなる充実を目的として、事例集に新たな事例が追加された。

しかしながら、昨年度の研究では、高等学校において、政治的教養を育む教育の重要性は認識しつつも、政治的中立性の確保やその教育内容等から、指導にとまどう教員も多いということが明らかになった。そこで、授業実践に向けた課題や手法等を整理するとともに、全ての教員が取り組むことができる授業プランを提案し、当教育研修所において「政治的教養を育む教育」実践講座を新設し活用することとした。

本年度の同講座においては、特に特別活動と総合的な学習の時間に焦点化して、生徒の政治的教養を育み、主体的に社会へ参画し協働しようとする態度を養うための授業プランを開発した。

本研究では、同講座の成果や教員の意識調査を踏まえ、政治的教養を育む授業を実践する上での留意点等を考察し、各学校における授業実践を促進するために授業プランを提案する。

1 今年度の「政治的教養を育む教育」実践講座について

(1) 講座の概要（研修内容について）

第 1 回（平成30年 7 月 4 日：県立教育研修所、受講者13名）

講座形態	研修内容	講師・助言者
講義	政治的教養を育む教育の充実に向けて －生徒が身に付けるべき政治的教養－	岡山大学大学院 桑原 敏典 教授
演習・協議	政治的教養を育む教育に取り組むための基本的知識及び留意事項 ・指導上の課題とその解決に向けて	県立教育研修所 指導主事

第 2 回（平成 30 年 10 月 10 日：県立姫路別所高等学校、受講者 13 名）

講座形態	研修内容	講師・助言者
公開授業	生徒の政治的教養を高める学習指導 (総合的な学習の時間における授業実践)	県立姫路別所高等学校 教諭
演習・協議	全ての教員による授業実践を促進するために ・授業プラン作成から実践までのプロセスを考える (実施した授業プランの修正案の考察・提案)	県立教育研修所 指導主事

第1回（7月4日）では、岡山大学大学院の桑原教授による政治的教養を育む教育の具体的な実践例や、授業を实践する上での留意点などについての講義を踏まえ、演習・協議で、特別活動や総合的な学習の時間に焦点化して、授業プランを作成した。

第2回（10月10日）では、その授業プランの中から、次に示す県立姫路別所高等学校の授業プランを实践した（授業者は同校の数学科の教員が担当した）。

(2) 公開授業における授業プランの紹介〔テーマ；地域資源の再発見〕

	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 (5分)	・ 本時の目標と流れを確かめる。 ・ 班に分かれる。 ・ 係を決める。 (進行・発表・記入・質問)	・ 本時の目標と流れを説明し、最後に班で一つ提案することを伝える。 ・ 夏休みの課題のテーマに基づき、6班に分けておく。 ・ 係の役割を説明する。	・ 本時の目標と流れを理解できたか。 (理解)
展開 (35分)	・ 統計資料を確認する。 ・ 活性化の対象となる地区と活用する観光資源を決める。	・ 事前講義の内容を確認し、姫路市の観光動向を再度おさえさせる。 ・ 夏休みの課題レポートに基づき、調査結果を簡潔に発表させる。 ・ 発表を踏まえて、活性化の対象となる地区と観光資源を決めさせる。	・ 地域活性化に向けて有用な観光資源を選べているか。 (思考・判断)
	・ 集客の具体策を考え、発表用の用紙にまとめる。	・ いつ、どこで、だれをターゲットにして、どのような集客を行うかという点を明確にさせる。 ・ 姫路市の観光動向のどの点を踏まえて立案したのかを明確にさせる。 ・ 協議が進まない班には、活性化の視点の中から関連するものをヒントとして与える。	・ 資料を客観的に分析できているか。 (技能)
	・ 具体策を発表する。	・ 1班2分を超えないようにさせる。 ・ 発表用コピー用紙を使って発表させる。 ・ 質問は係に質問させる。 ・ 時間がなければ質問時間をカットする。	・ 効果的な具体策を立案できているか。 (思考・判断) ・ 説得力のある説明ができているか。 (技能・表現)
まとめ (10分)	・ 振り返りシートを記入する。 ・ 本時の感想を述べる。 ・ 政治参加の方法を学ぶ。	・ 生徒の感想を踏まえ、課題について主体的に考えることの重要性を確認する。 ・ 生徒の意思を政治に反映させる方法を紹介する。	・ 自分の意見を政治に反映させるための制度について理解できたか。 (知識・理解)

県立姫路別所高等学校における授業実践までの流れは図1に示す通りである。まず、夏季休業中に「地域資源の再発見」というテーマで地域の活性化に取り組んでいる事例を探するという課題を与えた。9月には事前講義を行い、姫路市の人口推移や産業動向、観光動向調査の分析、日本の人口減少、IR推進法成立による観光の振興、地域経済の振興、財政改善などについての知識を与え、姫路市の活性化の視点について考えさせた。

これらの学習を踏まえ、上の授業プランを实践した。内容容量がかなり多いため、導入部分では、個人ワークと連動させて本時の流れや目標を理解させるなど、説明の時間を短縮する工夫が見られた。展開の部分では、授業者が各班の議論が活性化するように声掛けを行うとともに、時間が超過しないようにも気を付けていた。各班による発表では、生徒は自分たちで考えた活性化の方策を自分たちの言葉で伝えることができていた。そして、様々な意見が出たことに対して、授業者は批判的にならずに受け止めることができていた。最後に、授業者から政治的教養と普段の生活の関わりについて話をしながら本時のまとめを行ったが、授業内容を踏まえた上でのまとめであったため、生徒たちは関連付けて考えることができていた。本時の授業についての課題点・修正点については、第3章で詳述する。

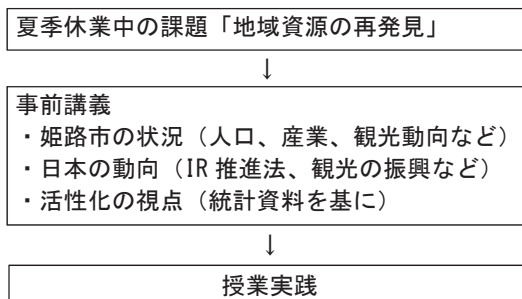


図1 授業プラン実践までの流れ

(3) 受講者アンケートからの現状と課題の分析（第1回・第2回を通して）

ア 受講者による評価から分かることについて

まず、受講者による評価については、「全体を通してこの研修に満足できた」の項目が、4点満点中の3.6点（平均）ということで高い評価を得た。このことから、昨年度の研究成果を踏まえた理論（第1回）と実践（第2回）という研修は受講者のニーズに適切に対応できたものとする。

イ 受講者による自由記述から分かることについて（意見の抜粋）

次に受講者による意見を抜粋して、意見から見えてくることについてまとめる。

- ・いろいろな教科の先生が受講しているのが良かった。
- ・今回の演習・協議では、特別活動や総合的な学習の時間での授業プラン（指導案）の作成であったが、自分の教科でも指導案が作成できるのではないかと思った。
- ・多様な展開が想定できることや、各校の所在地域や生徒の実態に応じてアレンジできることが分かり、いろいろなアイデアをもらった。
- ・主権者教育の考え方を改めることができた。現在、よく言われている主体的・対話的で深い学びを実践することが主権者を育てることにつながるのだと考える。
- ・今回の協議のように、他の先生方の指導案を見ることができれば、授業の幅が広がると思うので、このような講座があると助かる。
- ・自分で実践するだけでは客観的に振り返ることができず、また他者との意見交換もできないため、授業実践を見て、生徒の反応を確認することができて良かった。

このような意見から、今回の講座が、政治的教養を育む教育の実践にとまどう教員に対し、一定程度の効果があったものとする。一方で、少数意見ではあるが次のような要望もあったことから、できるだけ具体的な授業プランを紹介するなど、今後の本講座を改善していきたい。

- ・教員が自分で考えることが大切だと思うが、政治的教養を育む教育の実践例などをもっとたくさん知ることができれば良かった。
- ・単発の授業ではなく、年間を通じた計画や実施方法について学びたい。
- ・もう少し社会問題や時事問題に関わる内容（ヘイトスピーチ、LGBT、民族対立等）があると中身が濃くなると思う。

2 協力校（県立姫路別所高等学校）での授業実践前後のアンケート結果の分析と考察

(1) 生徒への事前・事後アンケートの内容と結果

公開授業の前後に、県立姫路別所高等学校 1 学年の生徒を対象に実施したアンケートの内容と結果を以下に示す。なお、事前アンケートでは157名、事後アンケートでは、152名の生徒から回答を得た。

ア 「政治的教養を育む教育」への関心・理解

授業前に、『政治的教養を育む教育』と聞いてどのようなことを思い浮かべるか」複数回答で尋ねたところ、「何も思い浮かばない」（48.4%）が最も多く、マスメディアで度々取り上げられている「模擬投票」についても22.9%にとどまり（図2）、「政治的教養を育む教育」や政治に対する関心の低さがうかがえた。

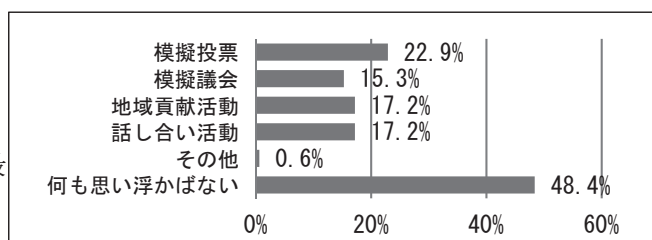


図2 「政治的教養を育む教育」への関心・理解

イ 興味関心・意欲の変化

授業前に、「地域の取組や施策に興味があるか」尋ねたところ、「ある」と回答したのは4.5%であったが、授業後に「地域の取組や施策に興味が高まったか」尋ねたところ、興味が高まったと「強く思う」「思う」は合わせて71.7%であった（図3）。また、授業前に、「地域のための活動

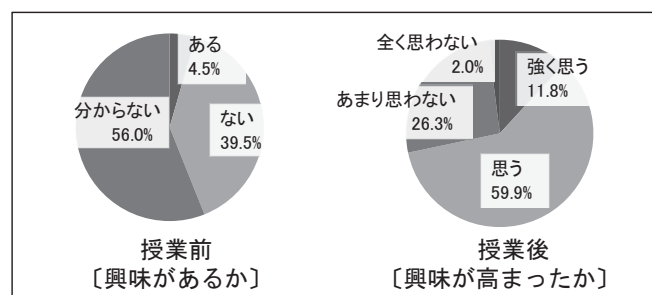


図3 地域の取り組みや施策に対する興味関心の変化

に参加しているか」尋ねたところ、「積極的に参加している」「参加している」は合わせて31.2%であったが、授業後に、「今後地域のための活動に参加しようと思うか」尋ねたところ、「強く思う」「思う」は71.0%であった（図4）。「自分の意思を政治に反映させてみたいと思うか」尋ねたところ、授業前には「強く思う」は0%、「思う」は17.2%であったが、授業後には、「強く思う」「思う」が47.3%になった（図5）。

授業前に「全く思わない」と回答した生徒（14.0%）は、その理由として、「政治に興味がなく、政治のことが全く分からない」、「自分の意思が反映されるわけがない」、「反映させたいと思うほどの意見を持っていない」等を挙げており、「あまり思わない」と回答した生徒（68.8%）を含めて大多数の生徒の、政治への理解不足、政治参加への意欲不足がうかがえた。

しかし、図3～図5に示したように、授業を通して、地域の取組や施策への興味関心、政治参加への意欲が高まったことがアンケート結果から推測できる。

ウ 授業後の自己評価

授業によって得られた成果について、①「地域の課題が発見できた」、②「自分の意見を言えた」、③「他人の意見を聞き、多様な考えを理解できた」、④「資料等を客観的に分析できた」、⑤「資料等に基づいて根拠立てて説明できた」、⑥「仲間と協働して課題解決を図れた」の6つの項目に分けて、それぞれの達成度を尋ねた。①・②・③・⑥の4つの項目では、「よくできた」「できた」と回答した生徒が90%を超えたが、④「資料等を客観的に分析できた」では53.3%（図6）、⑤「資料等に基づいて根拠立てて説明できた」では46.1%（図7）にとどまった。資料から必要な情報を読み取り、それを基に筋道を立てて説明する力を身に付けさせるためには、更に授業を工夫する必要があることが分かった。

(2) 教員への事後アンケートの内容と結果

今回の公開授業の後、「政治的教養を育む教育」実践講座の受講者13名（公開授業者1名を含む）と、公開授業と同じ内容で授業を実施した県立姫路別所高等学校教員5名、計18名に対して事後アンケートを実施した。担当教科の内訳は以下のとおりである。

国語	4名	地理歴史	4名	公民	2名	数学	4名
保健体育	1名	外国語	2名	家庭	1名	計	18名

ア 授業のねらいの達成度

公開授業のねらいについて、①「地域の課題を発見させること」、②「地域課題の克服のための方策を資料等の分析に基づいて考えさせること」、③「自らの考えを合理的に説明する力を養わせること」の3つの項目に分けて、それぞれの達成度を尋ねた。①については、「十分達成できていた」「おおむね達成できていた」が66.7%を占めた（図8）が、②は16.7%（図9）、③は44.5%（図10）であった。②が低迷した点については、1時間の公開授業の中では十分な活動時間を確保できなかったことが要因として挙げられるが、単元全体を通じて、生徒の自己評価が低かった項目であり、単元の計画を見直す必要があると思われる。自由記述欄では、「資料の読み込みの時間、分析し合う時間があれば良かった」、「資料の活用ができていたかが不明であったのは、発表の際に根拠が示されていないためでもあるので、理由を発表さ

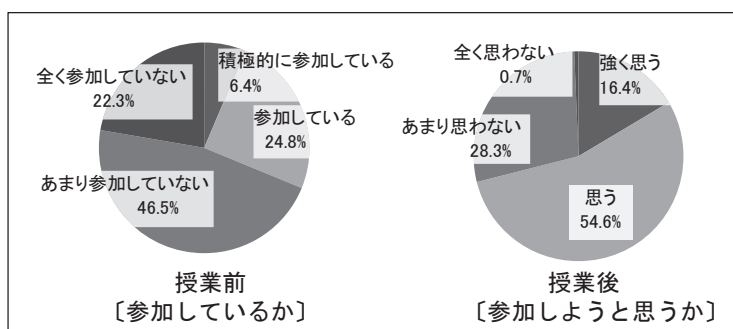


図4 地域のための活動への参加状況・意欲

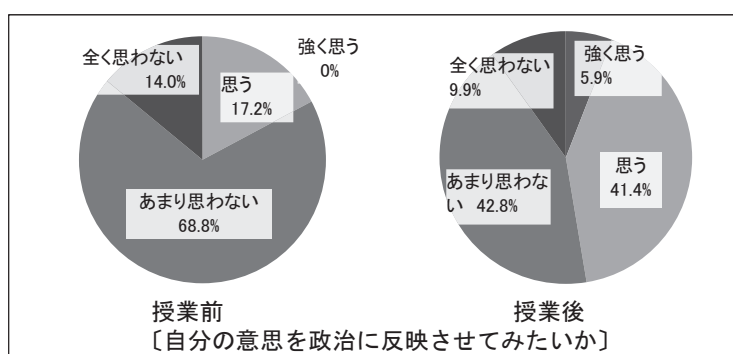


図5 政治参加への意欲の変化

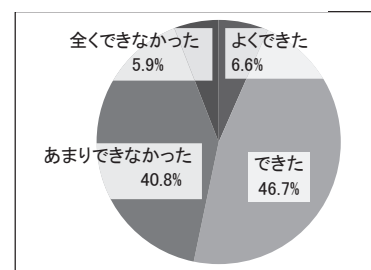


図6 資料の分析

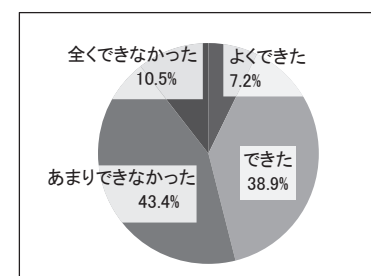


図7 根拠立てた説明

せるところまで活動に組み込めると良かった」といった意見が見られた。

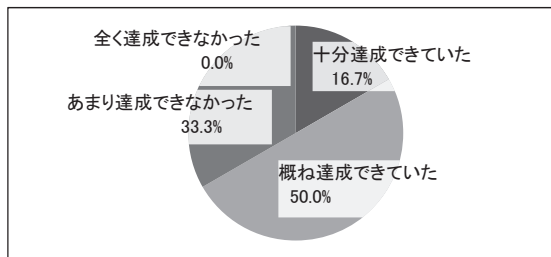


図8 (ねらい①) 地域課題を発見させる

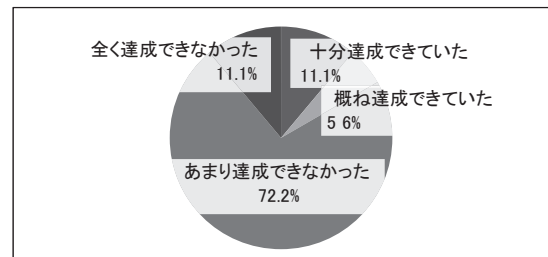


図9 (ねらい②) 資料分析に基づいて考えさせる

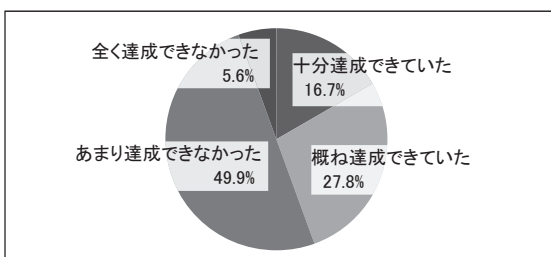


図10 (ねらい③) 合理的に説明する力を養う

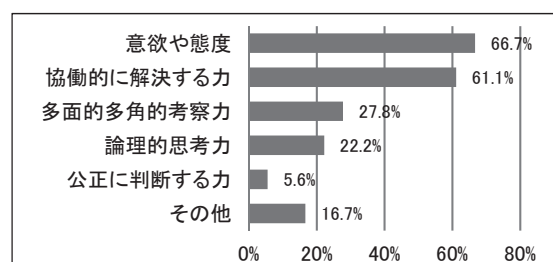


図11 高めることのできた力

イ 授業の成果

「授業を通して、生徒のどのような力が高まったと考えるか」について、複数回答で尋ねたところ、「公共的な事柄に自ら参画しようとする意欲や態度」(66.7%)、「現実社会の諸課題を見出し、協働的に追求し解決する力」(61.1%)の順に多かった(図11)。「その他」の記述欄には、「人の意見を聞く力」、「身のまわりのことを積極的に考える姿勢」が挙げられ、話し合い活動や発表に生徒が意欲的に取り組んでいたことが評価された。一方、授業のなかで見取ることが難しかった「論理的思考力」は22.2%、「現実社会の諸課題について多面的・多角的に考察する力」は27.8%にとどまった。また、今回の授業において「工夫されている点」を複数回答で尋ねたところ、「話し合い活動や発表」(83.3%)、「夏季休業中の課題レポート」(72.2%)の順で多かった。授業の中でレポートを活用する場面は見られなかったが、話し合い活動や発表をさせる前に、個人で調べたり考えをまとめたりすることが重要だと考えていることが分かった。

ウ 「政治的教養を育む教育」への意欲

授業を通して、『政治的教養を育む教育』についての具体的なイメージができたかについて尋ねたところ、「かなりできた」「少しできた」が83.3%を占めた(図12)。

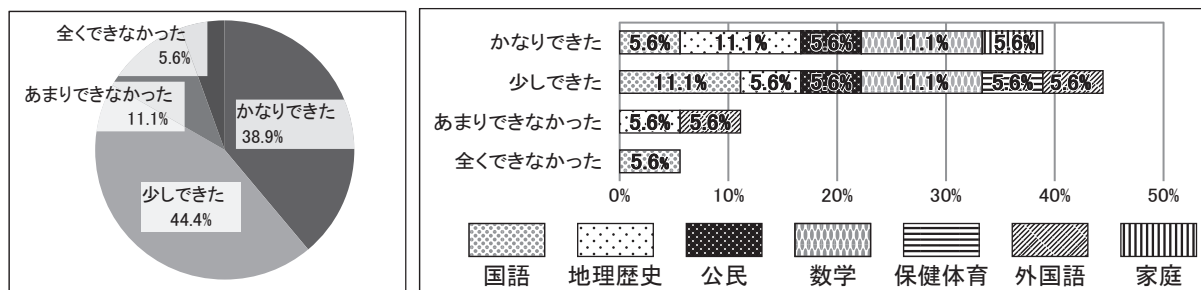


図12 「政治的教養を育む教育」の具体的なイメージ

また、『政治的教養を育む教育』に前向きになったかについて尋ねたところ、「前向きになった」「少し前向きになった」で100%を占め、「あまり前向きにならなかった」と「まったく前向きにならなかった」はともに0%だった(図13)。どちらも、教科による偏りは見られず、全ての教員が実践できる授業プランになっていたと言える。

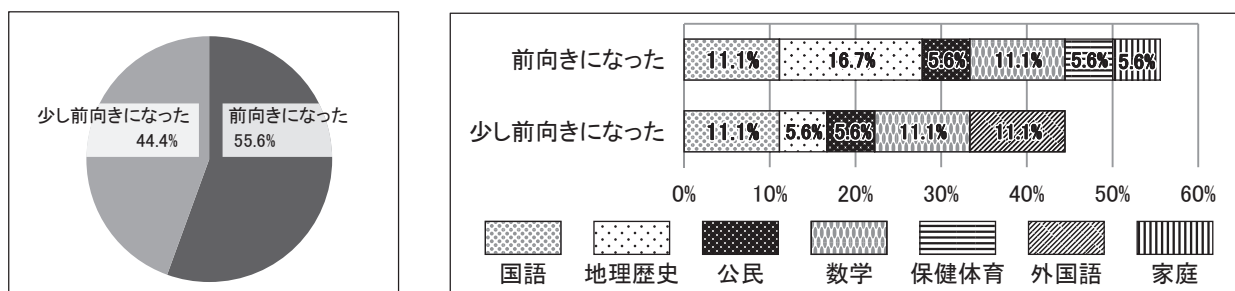


図 13 「政治的教養を育む教育」への意欲

3 新たな授業プランの提示

(1) 新しい授業プランの提案に向けて

ア 県立姫路別所高等学校での事前講義について

学年全体で「日本経済の動向と姫路の観光」というテーマで事前講義が実施された。この講義では高校生にとって規模の大きなものが背景にあり、経済用語、法的根拠など多岐にわたっての知識が要求される場面が多い。「大きなものから小さなものへ」という方法論で日本全体から姫路を見つめる方法をとっているが、膨大な知識を要求する場面が随所にあらわれるため、高校生には少し難易度が高いと予想される。そこで、「小さなものから大きなものへ」という逆の方法での取組を提案する。

日本経済の動向や政治の動き、国際政治や経済に関する知識から入るのではなく、例えば、姫路城とその周辺の観光地の日本人及び外国人の観光客動向調査から始めることで、ローカルで身近なところが世界とつながっているという意識付けができると考えられる。この手法で進めることで、一層効果的に生徒たちは学習できると考えられる。

イ 県立姫路別所高等学校での授業実践について

	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 (5分)	- 本時の目標と流れを確かめる。 - 班に分かれる。 - 役割を決める。 (進行・発表・記入・質問)	- 本時の目標と流れを説明し、最後に班で一つ提案することを伝える。<u>これらを事前にパワーポイント等で作成し、プロジェクターで投影する。あるいは、黒板に提示する方式をとる。 ※のちの展開部分の場面でも活用する。</u> - 夏休みの課題のテーマに基づき、<u>事前に</u>6班に分けておく。 - 係の役割を説明する。	本時の目標と流れを理解できたか。 (理解)
展開 (35分)	- 統計資料を確認する。 - 活性化の対象となる地区と活用する観光資源を決める。	- 事前講義の内容を確認し、姫路市の観光動向を再度おさえさせる。 - 夏休みの課題レポートに基づき、調査結果を簡潔に発表させる。<u>※夏休みの課題作成時に、地区と観光資源を絞り込ませておく。</u> - 発表を踏まえて、活性化の対象となる地区と観光資源を決めさせる。	地域活性化に向けて有用な観光資源を選んでいるか。 (思考・判断)
	集客の具体策を考え、発表用の用紙にまとめる。	- いつ、どこで、だれをターゲットにして、どのような集客を行うかという点を明確にさせる。<u>※インターネットに接続されたタブレットやパソコンを利用して、先進事例や法的根拠の調査を促す。全体に情報共有できそうなものについては、プロジェクターで投影する。</u> - 姫路市の観光動向のどの点を踏まえて立案したのかを明確にさせる。 - 協議が進まない班には、活性化の視点の中から関連するものをヒントとして与える。	資料を客観的に分析できているか。 (技能)
	具体策を発表する。	1班2分を超えないようにさせる。 - 発表用コピー用紙を使って発表させる。<u>※事前に発表形式を決定しておく。</u> - 質問は係に質問させる。<u>このとき、批判だけに終わらず、対案を持った形での質問になるように指示する。</u> - 時間がなければ質問時間をカットする。	- 効果的な具体策を立案できているか。 (思考・判断) - 説得力のある説明ができているか。 (技能・表現)
まとめ (10分)	- 振り返りシートを記入する。 - 本時の感想を述べる。 - 政治参加の方法を学ぶ。	- 生徒の感想を踏まえ、課題について主体的に考えることの重要性を確認する。 - 生徒の意思を政治に反映させる方法を紹介する。<u>※生徒会活動や地域の自治会への参加など身近な例を示す。</u>	自分の意見を政治に反映させるための制度について理解できたか。 (知識・理解)

図 14 授業プランの改善案

総合的な学習の時間を活用するという部分はそのままに、具体的な授業実践の場面において、様々な提案を行いたい。

最初の導入部分については、図14の①のように実施することで、情報共有の方法を工夫することができる。この方法は、後の展開部分で、統計資料や各種視覚資料を活用する際、一斉提示や、理解の周知徹底を図ることが期待できる。そして、板書事項から手書きの要素を極力廃してしまうことが可能になり、授業全体の時間短縮につながる。

次に、図14の展開部分の②についてだが、学習活動の「活性化の対象となる地区と活用する観光資源を決める」の部分で、夏季休業中の課題レポートを積極的に活用することが望ましい。レポートを課す際に、授業において活性化の対象となる地区と観光資源の具体案を提案することを事前に知らせておくとともに、②の要素を取り入れることで時間短縮を図り、より一層深い提案や、他の班からの質問に答えるための準備にも充てることができると思う。

また、各班が成果を発表する際には、班内で最低限の合意形成がとられているだけでは不十分であるので、学習活動の「集客の具体策を考え、まとめる」部分で、その方策は単なる思い付きではなく、根拠を持って主張できるのか、合理的かつ妥当な方策なのかを考察し判断させる必要がある。そこで、図14の③のように改善することで、効率化を図るとともに、各自の主観による合意形成を防ぎ、合理的判断に基づいた発表へとつなげることが可能になると考える。そして、図14の④のように、事前に約束事を決めるなどの適切な指導を忘れてはならない。

最後のまとめ部分では、高校生は普段、政治とはほぼ無関係な生活を送っているため、「政治的教養」という言葉が出てくると、「国政」「議会」「選挙」を連想し、自分から遠い存在で難しいものというイメージを持ちやすい。今回のテーマをもとに、身近なことがいかに世の中の様々なことと結び付きを持っているかという気付きを与えていかなければならない。そこで、図14の⑤のように、自主的な活動ができるように声掛けをすることが必要である。

(2) 政治的教養を育むための新しい授業プランの提案

前述した内容を踏まえ、授業プランを2つ提案する。これらは、「政治的教養を育む教育」実践講座（第1回）の際に受講者（授業プラン1は県立小野工業高等学校、授業プラン2は県立東灘高等学校）によって作成されたものを基にし、県立姫路別所高等学校の授業実践の修正内容を踏まえて作成した。

【授業プラン1】		特別活動 または 総合的な学習の時間			
1	対象学年	全学年			
2	単 元 名	地域のイベントに参加して、地域社会を見直そう。			
3	ね ら い	地元である地域で行われている行事やイベントへの参加を通して、そのとき発生する課題等と向き合い、主体的・協働的に課題解決を図るとともに、将来地域を構成する一員として、地域社会の活動に積極的に参画しようとする態度を育てる。			
4	本時の目標	課題発見・課題解決能力を身に付け、地域社会へ主体的、協働的に参画する態度を養う。			
5	本時の展開				
過程	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	教材・教具等
導入	活動の最終目標の確認	○地域のイベントに参加し、その一員として、地域に貢献すること（地域の人を笑顔にする等）を目標とすることを確認し、そのために必要なものは何かを考える。 ○どんな取組が適切なのか調べさせる。	一斉	・地域の一員として、主体的、協働的に活動に取り組むことを意識させる。 ・自分たちが楽しむ、やりたいことをやるのではなく、地域に貢献することなどを念頭に活動に取り組むよう働きかける。 ※プロジェクターを活用し、事前学習等で学んだことや自分で調べたことを踏まえ、全体で情報共有する。	過去の企画書の事例等

展開	地域のイベントへの出展企画 ・地域に対して、高校生がどのような貢献ができるのか。	○地域の人々に貢献することとして、どのような手段(方法)があるのか考える。 ○過去の事例等から得られることや改善点を考える。 ○各自が考えた案を班で共有し、活動目標を考える。 ○考えた活動目標をもとに、具体的な出展内容について考える。 ○出展に向けた課題を整理し、その解決方法を考える。タブレットやパソコンも活用していく。(ICTの活用)	個人 班別	・個人ワークでは、思い付くままに列挙するように働きかける(ブレインストーミング、シンキングツールの活用)。 ・個人ワークで出てきた内容を班内で分類して整理する(KJ法)。 ※各班4～5名程度が望ましい。	付箋、シンキングツール
	・自らの案を活かしてどのような活動ができるか。 ・企画書の作成	○実際の出展に向けたスケジュールを考え、企画書を製作する。 ○班で考えた企画書をもとにして全体で共有する。 ※共有の際には、大きな用紙へ簡潔に書き込み、1分以内で発表。	個人 班別	・出展内容、企画書を考えてときに問題点や疑問点はないかを考えさせる(質問づくりの手法:自分たちの中で完結するのか、もしくは地域と関連するのかをもとに解決策を練る)また、ネットに接続されたタブレットやパソコンを活用し、他の先進事例を検討することを促す。 ・問題点や疑問点を解決するための資料を再度集め、グループでの討議中に意見の偏りがいないか等も考えさせる(スパイダー討論の手法を活用)。 ・他班の企画書に対して、各班が疑問点を挙げるようにする(質問づくりの手法:地域と関連することを中心に質問する。また、批判だけに終わらないように注意する。)※このとき、質問する係を各班で事前に決めておく。また、全体で発表の順番やその方法を決定しておく。	整理用の用紙 企画書ひな形 質問づくり用紙 白紙の用紙
まとめ	振り返り	○各班から挙げられた質問・感想や各班の企画書をもとに、見直すべき点、参考にすべき点を踏まえ、企画書を再度練り直す。	班別 個人	・自分たちで気付くことのできない疑問、課題を発見できた点や新たな視点が見つかったことを意識させる。 ・地域振興に向けて活動している組織・団体や、市などの行政に提案できるかどうかあわせて検討させる。その際、根拠を提示できるように資料をタブレットやパソコン等を使って集めるように促す。	
政治的中立性の担保に関する留意点		最後のまとめでは振り返りの時間を十分に確保し、方向性等を示唆するのではなく、多様な意見・考え方を柔軟に受け入れることができるように指導・助言する。生徒に対して評価は実施しない。			

【授業プラン2】 特別活動 または 総合的な学習の時間					
1	対象学年	全学年			
2	単 元 名	政治的教養を育むホームルーム活動 ～ ボランティアを通じて感じたこと ～			
3	ね ら い	ボランティアの在り方を考えることを通じて社会に参画しようとする姿勢や資質を育成する。			
4	本時の目標	様々なボランティアなどの過去の経験を踏まえ、新たなボランティア活動を検討したり、行政に取り組んで欲しい項目を検討したりすることで、社会に関心を持つ態度を育む。			
5	本時の展開				
過程	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	教材・教具等
導入	本時の内容について確認	○本時の目標が新たなボランティア活動を考えることであることを理解する。 そして、ボランティアの意義を考える。	一斉	・日常生活で感じたことや考えたこと、自分の思いや考えを積極的に述べるように促す。	全国のボランティア先進事例等
展開	ボランティア経験者からの発表	○ボランティア活動経験者の話を聴き、その意義や課題について考える。 ※3名程度。時間は3分程度	一斉	・様々なボランティア活動の際に実施されたアンケートの結果を配布し、意義・課題について考えさせる。※事前にパワーポイント等で結果や発表者の話す内容の要点をまとめ、プロジェクターを活用し	アンケート結果

展開	ボランティア活動が必要であるものの検討	○話を聴いた後、ボランティア活動について内容や実践例を整理する。 ○他の先進事例を踏まえ、新たに取り組めることを考える。 ○グループで似た内容のものを整理する。 ○班として一つを選ぶ。	個人 班別	・て投影してもよい。あるいは、黒板に発表者の要点をポスターセッション形式で掲示してもよい。 ・付箋に書かせる。 ・自由に考え、様々なボランティアの課題から改善点を考えさせる。 ※ネットに接続されたタブレットやパソコンを活用し、取組例を参考にすることも促す。それと同時に改善策も考えていく。 KJ法を用いる。※細分類しないように注意を促す。	付箋 模造紙
	ボランティア活動と行政に依頼すべき項目の選別	○出てきた意見の中で新たにボランティアとして自分たちが取り組めるものと行政が取り組むべきものを分ける。 ○ボランティアの在り方を再考する。	班別	・実現可能なものを取捨選択する。その際、根拠を提示できるように資料をタブレットやパソコン等を使って集めるように促す。 ・ボランティアも参加できる場合とできない場合のものがあることを共有する。	
まとめ	本時の振り返り	○今後も地域社会を見ながら課題を発見していくことを再認識する。	一斉	・今後も自分の暮らす地域社会を見ながら課題を発見していくことを促す。そのために、日々、様々なことに対して意識を向けていくことを伝える。※このことが政治的教養を育むことである。	
政治的中立性の担保に関する留意点		最後のまとめでは振り返りの時間を十分に確保し、方向性等を示唆するのではなく、多様な意見・考え方を柔軟に受け入れることができるように指導・助言する。生徒に対して評価は実施しない。			

これらの授業プランは特別なものではなく、自らが暮らす地域の課題を発見し、その解決策を考えると
いう仕掛けを取り入れることで作成できるものである。こうした地域社会に積極的に参画する態度や姿勢
を養うことが、「政治的教養を育む教育」の目的の1つである。

おわりに

本年度の研究のまとめとして提案した「政治的教養を育む教育」のための新たな授業プランは、内容として大きく3つのことを意識した。それは、課題の発見と課題の解決、根拠を持って論理的に説明するという
ことである。これらについては、次期学習指導要領において全ての教科に求められていることであり、各教科
においてこのような視点を取り入れて授業の工夫をすることが、生徒の政治的教養を育むことにつながり、
次期学習指導要領で強調されている「主体的・対話的で深い学び」も同時に実現することになると考える。

岡山大学の桑原教授によれば、「そもそも政治的教養を育む教育とは、政治に積極的に参画するために必要
な知識および態度や姿勢を養うこと」であるが、いきなり政治参加と言っても、授業者である教員にも、
授業を受ける生徒にも抵抗があると思われる。そこで、生徒が暮らす、または学校のある地域社会を入り口
とすることで、政治参加をより身近なものとして捉えさせたい。

これらを踏まえ授業プランの構成を整理すると、

- ① 導 入：事前学習として、主体的に自分の暮らす地域社会の特徴等を調べ、課題を発見する。
- ② 展開1：調査した資料等を分析・考察して、地域社会の課題解決のための方法を考える。
- ③ 展開2：考えた解決策を合理的に他者に説明し、意見交換をするような対話的な活動をする。
- ④ まとめ：授業の最後の振り返りの中で、解決策の妥当性や有効性を継続して考え、深めていく。

という要素を仕掛けとして取り入れることになる。

こうした授業プランを通して、「政治的教養を育む教育」の指導に教員が難しさを感じているという状況
を改善し、全ての教員が自信を持って授業に取り組み、さらには次期学習指導要領にある「主体的・対話的
で深い学び」の実現にもつなげていけるよう、引き続き研修講座の内容充実を図りたいと考えている。

そのためにも、作成した授業プランをできるだけ多くの学校で実践することで理論と実践の融合を図り、

さらに授業プランの精度と有効性を高めていくことに努めたい。

最後に、本研究の趣旨を理解し、公開授業、アンケート調査、授業プランの開発にご協力いただいた県立小野工業高等学校、県立東灘高等学校の教員、また姫路別所高等学校の学校長をはじめ教員、生徒の皆様に心より感謝の意を表する。

〈参考文献・資料〉

- ・ 総務省・文部科学省『私たちが拓く 日本の未来 有権者として求められる力を身に付けるために』（活用のための指導資料），2015
- ・ 兵庫県教育委員会『参画と協働が拓く 兵庫の未来 ～政治的教養をはぐくむ教育の充実に向けて～』，2018
- ・ 広田照幸『高校生を主権者に育てる シチズンシップ教育を核とした主権者教育』学事出版，2016
- ・ 桑原敏典『高校生のための主権者教育実践ハンドブック』明治図書，2017
- ・ 坂井俊樹・小瑤史朗・鈴木隆弘・國分麻里『18歳までに育てたい力 社会科で育む「政治的教養」』学文社，2017
- ・ 宮下与兵衛『高校生の参加と共同による主権者教育 生徒会活動・部活動・地域活動でシチズンシップを』かもがわ出版，2016
- ・ 橋本康宏・藤井剛『18歳からの授業LIVE政治参加』，清水書院，2017